



第38号(2025年夏号)  
発行日 2025年8月25日  
信州大学教職支援センター

Shinshu University  
Center for the Teaching Profession



# 教職支援センター

# ニューズレター

## 巻頭言 【 帰 還 不 能 点 】

今から5年以上前になるが、2017年12月26日に、文部科学省は「学校における働き方改革に関する緊急対策」(文部科学大臣決定)を発表している。その元となった、中央教育審議会「新しい時代の教育に向けた学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について(中間まとめ)」では、2016年度の勤務実態調査の速報値で小・中学校の教師の全職種の勤務時間が10年前と比べて増加した点と関わって、「勤務の長時間化の要因」を次のように指摘している([https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1400723.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1400723.htm)) 以下、概括したものを「問い」の形にしたものである。

1. 教育委員会や学校の業務改善によって短縮された時間以上に、授業や部活動の時間が増加しているのではないかな？
2. 中学校で土日の部活動時間が倍増したのは、週2日以上以上の休養日確保が浸透していないからではないかな？
3. 学校宛の調査は精選されてきたが、「調査の解答」時間よりも「その他」(校長・教育委員会等への報告書や学校運営や予算・費用処理に関わる書類作成等)の業務時間が長く、その手立てが不十分なのではないかな？
4. 小学校では学校行事の準備や地域・保護者対応に多くの時間が費やされ、中学校ほど重点化・精選が進んでいないのではないかな？
5. 国や教育委員会において業務全体を俯瞰し優先順位をつける視点が不足しており、市町村教育委員会の業務改善も遅れているのではないかな？
6. 給特法(公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法)の影響もあり、勤務時間管理の意識が希薄で、登下校時間など、活動時間の設定について教職員の勤務時間が配慮されていないのではないかな？
7. 家庭や地域の役割が学校に委ねられ、学校や教師が担うべき業務範囲が曖昧になっているのではないかな？
8. 教材や指導案の共有が進まず、教師の「自作」が前提視されているのではないかな？
9. 「子どもたちのために」という使命感と責任感から、子どもに関わるあらゆる業務を自らの業務とみなすことで、業務範囲の拡大を招いているのではないかな？
10. 学習指導要領改訂で授業時数が増加したにもかかわらず、教師の持ち授業時数を減らす教職員定数の改善が不十分ではないかな？
11. スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどの専門スタッフの1校あたりの勤務時間が短く、十分な機能を果たせていないのではないかな？

これらの「問い」は、政策動向に伴う物理的な問題から、制度の設計・運用問題、教育関係者の意識(メンタリティー)の問題、業務の推進体制の問題、国・地方・学校・家庭・地域が担うべき責任・権限問題に至るまで、「日本型学校教育」をなんとか支えてきた構造的特徴の「負」の側面に焦点を当てたものであり、2025年夏の時点でも今なお重要な論点といえよう。他方、こうした指摘をどの程度真摯に受け止め、検証した上で次なる施策が展開されているかは疑問が残る。

もっと前に進むために、しっかりと立ち止まり、振り返る。「検証なき業務改善論」から脱却してはじめて、よって立つべき土俵の地平も見えてくるはずである。航空用語における「帰還不能点」を指す「No Reflection, No Return.」は笑えない。



荒井英治郎(教職支援センター 准教授)

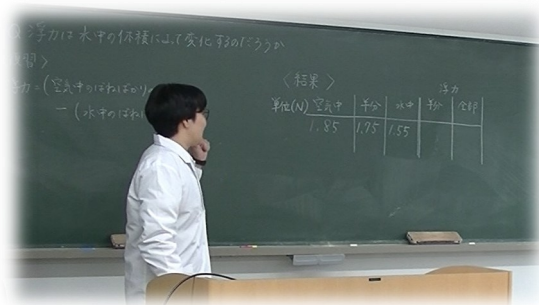
## 初級CST養成講座を振り返って②



令和6年12月7日(土)松本キャンパスにおいて、令和6年度初級CST認定修了審査会を実施しました。CST(Core Science Teacher)とは、教育現場で中核的役割を果たす理科教育に精通した教員です。信州大学は長野県教育委員会と共同でCSTの人材養成に取り組んでいます。



### 【中澤明子さん(理学部)】



教育実習先で、「今時、塾でも勉強できるのに学校でみんなそろって勉強するのはどういう意味があるのか」考える機会がありました。その時に、理科は身近な現象や事象を扱うんだから、自分の目で見て、体験することができる機会を作れることが塾とは違うところで、正しさを求めるだけではなく、なぜ・どうしての疑問を大切に、クラスの生徒と予想や考察を共有しながら柔軟でかつ論理的な思考を身につけることが学校に求められていることだと知りました。

そんな中、CSTの活動で、自分自身も当たり前だと思って過ごしていた事象を簡単な実験で体験し、仕組みが理解できた経験はとて

も貴重な時間だったと思います。教員は生徒に教える立場ではありますが、生徒と一緒に学び、探究を楽しむ姿勢が必要なのだと改めて感じました。

15分の模擬授業を大学で行うとなった時に、実習校の設備とは異なることの考慮が足りず、準備不足のままできそうなことをまとめてやろうと考えたのはかなり失敗だったと思いました。このCSTの模擬授業のテーマをしっかりと把握した上で準備できていれば、当日も探究的な授業が展開できたのではないかと反省しています。



### 【佐藤陽紀さん(工学部)】

理科の楽しさを身近な例から考えることが、模擬授業ではできなかったと考えている。質疑応答にて「分かっている人がする授業」との指摘について、理科で分からなかったところがほとんど無かった私の視点だけでは説明が不十分なところが多く、生徒の感じる不思議について深く考えられていなかったと感じた。

教材について「なぜ質量は減少しないのか」と「なぜ質量は減少するのか」では着目する視点が異なり生徒が考えることも変化するため、生徒がどのように感じるのかを理解してから選定する必要があると感じた。

模擬授業では触れなかったが、過去の実験を基に考えられるような学習問題を設定しなければならないと感じている。学習問題や学習課題では生徒は「減少する」「変化しない」など選択肢を絞られてしまう問いかけになってしまっているため、「なぜ変化しないのか」などその理由について説明しなければならないような問いかけを心掛けることで、電子天秤の表示する質量以外のところにも生徒の目を向けることができるなど生徒に対してどのように関わっていくのかということを大切にしなければならないと感じた。生徒が体験的に理科の楽しさや奥深さを学べる教材を取り入れることはできなかったが、CSTの活動を通して色の見え方や電子レンジの仕組み、音の聞こえ方などの伝え方を学ぶことができたため良かったと感じている。





### 【大窪佑弥さん(理学部)】

小学校では学習課題について黒板に書いて音読やノートへの記入を指導されるが、学校段階が上がるにつれてそのようなことも行なわれなくなって高校では明示しない先生や授業も多かった。教育実習中に現職の先生の授業を見学しても実習録の学習課題の欄にはっきり記載することが難しかったが、学習課題は明示する必要がどの学校段階でもあることを知った。

今回の内容は実際の授業では分光器を使用した観察や地球のエネルギー収支計算など時間がかかる内容であること、教育実習ではホワイトボードが1つだけだったことから初めにスライド上に表示していたが、プリントにも記載すべきだったと感じた。模擬授業は55分の授業を15分程度まで縮めているので細かい発問等が審査員の先生方に伝わりにくかったことと、事前にプリントを配布することが可能であったことを知らず添付出来なかったことが残念であるが、授業の内容を伝えることができて良かったと感じた。

教育実習では、プリントも穴埋め形式ではあり、担当したクラスは文系コースではあるものの、担当の先生からの指導で徐々に論述形式の問題や生徒に考えさせる形式の授業を取り入れて暗記科目と思われがちな地学からの脱却をすることができたのではないかと感じた。

### 【新宅彩乃さん(工学部)】

私は今回のCST講座で実験計画を立てる授業を行った。実験の計画を立てるというのは、どこまで生徒のやりたいようにやらせて、どこを制御するかとのバランスが難しいと感じた。

先生方からの意見の中で、粒子の観察を生徒にやらせてほしいというものがあつた。今回の授業を教育実習でも行った際、この授業は次時に行う実験の計画を立てる授業だから、粒子を観察する実験方法を加えると授業時間内に収まらなくなってしまうと思い、観察を行わないように誘導してしまつた。

先生方からの意見にもあつた通り、本時で粉を配つた際に、ルーペも一緒に配り観察をさせることで、ワクワクを高めるとともに、観察という1つの観点からだけでは、物質Xは特定できないということを分かってもらうことができたのではないかと気づくことができた。

先生方の意見の中で印象に残っているものは、生徒の発言に対して「ありがとう」というのは良くないというものだ。私も生徒から意見が出た際には、意見を言ってくれてありがとうという気持ちで「ありがとう」と言っていたが、「いつになっても、どんな意見に対しても絶対に「ありがとう」と言えなければ、「ありがとう」と言ってもらえなかった生徒は意見を言わなくなってしまう。」という意見を聞いて、「ありがとう」という言葉をむやみに使つてはいけない理由に納得した。このことから生徒からの意見には、「なるほど」といった受け入れる返答をするというのが良いのだらうと考えた。

他の方の授業はICT活用や、大きなプリントを生徒と一緒に埋めていく、イメージしにくいものを目に見えるものに置き換えてイメージしやすくするなどの工夫がたくさん施されており面白く、とても参考になった。実際授業をする際には、今日見させていただいた授業アイデアを参考にしながら授業をつくっていきたいと思った。



### 【近藤友香さん(農学部)】



4年間CST講座で学んでみて、自分が想像していたよりも身の回りには理科を学んだり、興味をもつきっかけを作ったりできるもの・現象が沢山あることが分かった。どんな材料が使えるか、ある材料をどうやって使っていくのかを考えることで、自分自身にも新しい発見があるのではないかなと感じた。また、材料を様々な角度から見て工夫するその過程自体を教員自身が楽しむことで、少しかもしれないけれど生徒にも楽しさを伝えられるのではないかなとも感じた。たまたま目にしたものや現象をどう結び付けるのか、伝えたい内容を伝えるツールとして目の前にある道具をどうやって利用していくのか、常には難しいかもしれないけれど、この気持ちを忘れないようにしたいと強く思った。

CST講座を通して、身の回りに溢れているもの・現象に対する見方を広げることができた。教員になるかならないかはまだ決めていないが、今後もいろんなことにアンテナを張って興味をもちながら過ごしていきたいと思った。



# ■ ■ ■ 人文学部博物館実習から ■ ■ ■



早いもので信州に来て18年が経ちました。福岡の出身ですが、姓が信州に比較的多い「金井」ですので、地元と勘違いされることも多く、まあ、勘違いも活かしながら(?)街のみなさんとも仲良くさせてもらっています。人文学部では主に美術史を教えますが(専門は新古典主義。近代的なミュージアム誕生の背景なども勉強してきました)前職が愛知県豊田の美術館学芸員であったこともあり、ゼミでは現代美術企画のキュレーションやマネジメントを、また、学芸員養成課程科目の博物館実習Ⅰを担当しています。

その実習について。毎年、安曇野市の文化課や同市内の公立・私立のミュージアムのみなさんのご協力を得て、バスツアー(複数のミュージアムの見学と意見交換会)と資料登録実習、そして学内展示を行っています。これまでに映画監督の熊井啓、工芸作家の高橋節郎、彫刻家の高田博厚などを取り上げ、貴重な資料に触れながら、実践的な勉強を進めさせていただきました。展示の準備と実施にあたっては、安曇野側からお助けいただくことばかりですが、一方、人文学部の学びの多様さが生きるところもあって、たとえば古文書を扱う学生や、仏語・独語を読める学生、地域史・現代史に関心を持つ学生、広報デザインを得意とする学生などが力を合わせ、毎年、展示の質を高めています。

ところで、安曇野のミュージアムはいずれも小規模です。館の学芸員数も少ない。ただし公立館を中心にネットワークがしっかりしており、見方を変えれば、全体でひとつの総合博物館のようです。一方、信州全体については、たとえばシンビズムという美術館学芸員のネットワークがあり、企画展の共同開催などを活発に進めています。そんな全信州の人に支えられたミュージアムの豊かな生態系(と呼んでよいでしょう)について考えるとき、あらためて大切になるのは、学芸員を地域で育てつづける安定的な仕組みだと思います。その意味で、大学の学芸員養成課程はとても重要な役割を果たしています。地域の歴史・文化・自然・環境を支える基盤と言ってもよいでしょう。各地で信大出身の学芸員の活躍に触れるたびに、その思いを強くします。

今後も信州大学における学芸員養成の重要性が十分に理解され、その維持・発展に全学的・全県的な支援をいただけることを、関係者のひとりとして、強く願っております。

金井 直(人文学部教授)



意見交換会  
(豊科交流学习センター「きぼう」  
2024年11月24日)

「資料紹介 熊井啓」  
(信州大学附属図書館  
中央図書館、2025年1月)より



## 教職支援センター 5～8月の動き

- 朝日村未来塾開講式(5/10) ○松本市教委訪問(5/13) ○上田市教委訪問(5/13) ○伊那市教委訪問(5/21)
- 山形村未来塾開講式(5/24) ○小川村未来塾開講式(5/24) ○南箕輪村教委訪問(5/28)
- 長野県総合教育センターとの連絡協議会(5/30) ○生坂村未来塾開講式(6/7) ○CST養成プログラム実施委員会(6/10) ○第1回教職支援センター運営委員会(6/25) ○学芸員養成課程実施分科会(7/18)
- 教職事務担当者勉強会(8/29)

### 編集後記

例年以上の暑さが続いています。教員志望の4年生は、採用試験真っ只中。夏の2次試験対策はラストスパートです。模擬授業対策、面接対策と、いつも以上に真剣なまなざし。納得のいく結果になりますように。(広報担当 橋本萌)

